

仮釈放日の “お約束”

通信 ふうじしほほの
ふみみのの



東江一紀

毎週月曜日は、まあ、仮釈放日ですね。

いまだ外にほとんど出られない懲役生活が続いているのだけど、週一回、神保町にある某寺子屋式翻訳学校に出講しなくてはならず、それもまた出張懲役みたいなものではあるが、電車に乗って遠くへ行くというだけで、今のわたしにはお祭りの気分。月曜日になると、

心がそわつく。

まるで遠足に行く幼稚園児のように、前日のうちに授業の下準備を整え、お菓子をリュックに、じゃなくて、教材やら参考資料やら行き帰りの電車で読む本やらをバッグに詰め込んで、それを枕もとに置き（というのは、うそだけど）、寝酒を飲みつつ、あしたの娑婆

の華やぎに思いを馳せるんであります。

そして、いつもの朝よりやや滄刺とした気分を目を覚まし、そそくさと朝飯をすませて、バッグを手につかむと、「行ってきま〜す」って、おい、おい、授業は夜だろ。

ははは、そうでした。焦っちゃいけない。夕方まではちゃんと、囚人としてのお務めを果たさないかね。しかし、気持ちがあふわわわわしているもんだから、なっかなかエンジンがかかりません。頭のなかがお出かけモードで、原書の文字が踊ってやがんの。こら、こら、落ち着きなさい。って、落ち着いてないのは、あんたでしようが。

とまあ、さざめく心をどうにかパソコンの前にしぼりつけて、八時半から四時過ぎまで、約半日ぶんのノルマをこなし、いよいよ出勤。ちっとも底の減らないウオーキングシューズを履き、「お父さん、帰ってくる家、間違えないでね」と、口の減らない息子に見送られて、束の間の自由へと足を踏み出す。

駅まで十二、三分の道のりを歩いて、息が切れるというのが、ちよつと情けないですね。呼吸を整えつつ、切符を買って、駅に入る。来た電車に乗る。ゆうべ用意した車内読書用の本を開く。いやあ、至福、至福。ひたすら至福を肥やすばかりの小田急線であった。

そのあと、千代田線、半蔵門線を乗り継ぎ、

五時半ごろ神保町に到着。これからの三十分ほどが、わたしの自由行動の時間です（食事の時間を含む）。書店を冷やかしたり、道行くおねえちゃんを冷やかしたり（うそ、うそ）、喫茶店で本を読んだり……。

そして、いよいよ保護司のもとへ出頭する。前述の寺子屋式翻訳学校です。なぜ寺子屋式かというと、教室ひとつと事務局があるだけで、その教室も、最大限に詰め込んで十六人しか入らない。少数精鋭を標榜するよりほかに手がないわけで……。

同業者のなかには、「どうしてわざわざ、自分の手でライバルを育てなくちゃならないんだ？」と、翻訳学校で教えることに否定的な人たちもいる。

そんなやわな考えで、どうします、あなた。伸びそうな芽は、大きく育つ前に摘んでしまわなきゃ。鉄は熱いうちに冷やせ、ですよ。

翻訳学校というのは、ほうっておくと開花してしまいそうな才能の持ち主を一カ所に寄せ集めて、一定期間束縛し、素質と情熱をしばませる目的で作られた、既成の訳者の権益保護のための機関なのだった。

というわけで、わたし、出る杭を打ちまくるべく授業にいそしみます。こっちがいくらつぶすつもりでいても、勘のいい生徒はそれを察知して、ひよいひよいと身かわし、腕

を上げたりするから、油断がならない。まさしく苦闘の百二十分ですね。

闘いを終えたあとは、敵を懐柔するため、有志数人と放課後の酒を酌み交わす。懐柔といいながら、わたしはなおも攻撃の手をゆるめない。アルコールをひとり大量に摂取したうえで、割り勘に持ち込み、経済的にも生徒に損をさせるのだ。圧勝、圧勝。

勝利の興奮と半端な酔いのせいで、帰りの電車のなかでは、読書があまりはかどらない。特に小田急線は、やたら混んでいるので、窓の外をぼんやり眺めながら、突っ立っていることになる。

いつも乗る急行の六両めあたりに、南側を向いて立っていると、成城学園前で停まったとき、目の前に料飲店の並んだ路地が見える。生酔い状態のわたしの魂は、闇になまめかしく浮かぶネオンに吸い寄せられる。〈かおる〉

〈山小屋〉 〈雪国〉 〈約束〉 ……
見るたびに引つ掛かるのが、〈約束〉という店名だ。例えば、「今、〈かおる〉で飲んでから」と家に電話をするのは、ごく自然ですよね。「きょうは〈山小屋〉に行こう」とか「〈雪国〉で待ち合わせ」とかいうのも、べつ

に変わらない。
だけど、〈約束〉はどうか？ 〈約束〉で飲むのも、〈約束〉に行くのも、〈約束〉で待ち

合わせるのも、なんだか意味深で、すごいことのように聞こえないか。

〈約束〉という名の酒場へ、人はいったい、何をしに行くのだろうか？
いや、たぶん、酒を飲みに行くんでしょうが、なにせ〈約束〉ですもの。半端な気持ちでは足を運べない。何か重苦しい、使命感のようなものをかかえて、眉間にこう、しわを寄せつつ、そこへ向かうんだろうなあ。

どんな店なんでしょう？ なじみの度合によつて、「空約束コース」「口約束コース」「密約コース」などというのがあって、勘定が払えなくなると、約束手形を書かされたりするんだろうか。

これだけ期待させといて（勝手に期待しているだけですが）、なんの変哲もないただのスナックだったりしたら、約束が違う、ってことになるよなあ。

よし、今度の刑期が明けて、ちよつとだけ暇ができたなら、誰かを巻き込んで（ひとりじゃこわい）、あの店に入ってみるとしよう。その前に、しかし、編集者とのお約束をちゃんと果たさないとね。

そろそろ日付の替わりそうな時刻、駅からの暗い田舎道を歩く囚人の胸には、数時間後に再開される懲役生活への英気が……あれっ、英気、どっかに落としてきちゃった。